

# Meは横組, 拙者は縦組

和  
欧  
混  
植

小宮山博史

◎浮世絵師三代目広重は「東京第一名所銀座通煉瓦石之図」で、銀座二丁目東京日日新聞日報社の玄関の石段を上ろうとしている岸田吟香きんこうの後ろ姿を描いています。本名は銀次ですが友人に「銀公」と呼ばれていたために号を吟香と付けた彼は、毎日新聞の前身である『東京日日新聞』創刊間もない明治六年九月に主筆として入社し、口語体で雑報(社会記事)を書いて名を馳せました。

まだ明治と改元する前ですが、目を病んで長い吟香は友人の蘭学者箕作秋坪みつくりしゅうへいの勧めで、横浜谷戸橋際にある寺院風の屋根を載せたアメリカ人医師の施療所を訪れます(居留地三九番、川を渡れば本村(ほんむら)で今の元町です)。アメリカ人医師の名は James Curtis Hepburn、北米長老会宣教師で眼科医、日本ではヘボンと呼ばれ、本人も「平文」と記す人です。吟香を一ヵ月以上にわたって悩ました眼病は、ヘボンの点眼治療で七日ほどで嘘のように全快します。吟香はヘボンについて次のように書いています。

「ヘボン先生に逢ひて、其徳高く、行なひ正しく、靄然として君子の風あるに感じ、深く敬慕の意あり。依て閑を乞ふて高説を承まはらんと云ふに、先生も亦大に喜べり。即

ち治療終るに至りて、共に書齋に入りて、談話しけるが、遂に日本の言語文字の事に及べり」

日本派遣宣教医ヘボンと夫人クララを乗せたサンチョ・パンザ号は一八五九（安政六）年四月二四日ニューヨーク港を出帆します（この五日後の二九日にスエズ運河の工事が始まります）。大西洋を押し渡って喜望峰を回り、インド洋を乗り切って香港に着いたのが八月二日。香港で休養ののち出発し上海到着は八月二九日、一〇月一日上海を汽船で出港し一〇月一七日神奈川に到着します。江戸湾に入って本牧の鼻を大きく回り込むと、神奈川を目指す外国人のほとんどが絶賛してやまない緑豊かで美しい根岸村から横浜村への海岸線が続き、そして正面には優しい稜線が天にのびる富士山。ヘボン夫妻もこれからはじまる日本での活動に心を躍らしながら、この風景を船上から眺めていたのだと思います。

翌一八日上陸し神奈川宿の成仏寺を宿舎とします。神奈川宿は開港当時外国領事館の町でした。米領事館は神奈川関所の少し手前の本覚寺（青木橋際、京浜急行神奈川駅のそばで、私が預かる研究所はここから五分です）にあり、英国領事館は滝の川のはどりの浄滝寺（亡師佐藤敬之輔が眠る寺です。研究所のすぐそばにあります）に、フランス領事館は成仏寺の隣の慶運寺に、オランダ領事館も近くの長延寺に置かれていました。ヘボンの治療所ははじめ宗興寺（浄滝寺の隣）に置かれ、そののち居留地三九番に移っていきます。居留地三九番は現在では横浜人形の家の隣の横浜地方合同庁舎が建っているところで、「ヘボン博士邸跡」の碑が建っています。

この治療をきっかけに岸田吟香はヘボンの人柄にうたれ、編纂中の和英辞典の制作に協力することになります。高谷道男は自著『ヘボン』（吉川弘文館人物叢書、一九八六年）のなかで辞書の編集出版の目的を次のように書いています。

# へボン, 吟香は 辞書を印刷するため上海に滞在する

『和英語林集成』の印刷

「日本人を西洋文化の理解に向わしめ、他方外国人には日本を正しく理解せしめんとする意図があったとともに、また日本語の充分な知識と理解なくしては立派な日本語の聖書の翻訳事業は達成し得ないことをよく知っていた。日本人に正しいキリスト教を伝えるには立派な完璧に近い聖書の翻訳とその出版がなければならぬ」

◎へボン夫妻は岸田吟香をともない、一八六六（慶応二年一月一八日横浜から上海に向いました。膨大な原稿を印刷するのは上海県城小東門外に建つ北米長老会印刷所美華書館です。上陸したへボン達がどこへ投宿したかはわかりませんが、考えられるのは二つです。ひとつは美華書館に滞在すること。教会が運営する印刷所ですので、工員のはほとんどは信者です。一九〇二年建設の美華書館印刷工場の例でもわかりますが、敷地内あるいは館内に礼拝堂や工員用の住宅を持っていたとしても不思議はありません。外国人、ここではアメリカ人ですが、彼ら用のレジデンスも持っていたかもしれません。もう一つは、泉城南門外のすぐそば（美華書館から南へ一・五キロほどのところ）に北米長老会が一八六〇年に建てた教会清心堂がありますので、ここを宿にして美華書館に通った、想像できるのはこの二つです。

岸田吟香が上海滞在中に書いていた『吳淞日記』ウーソンには、口語で作業の様子が書かれています。

「もうちきお正月だ。けふのやうな日は、ゆどうふに、せうなべかなにかうまいもので、くだらねエじやうだんでもいつて、四五人集まつて、酒でものむほうが、からにゐるよりかよさそうだ。ここになてもおもしろくねエ。早く日本へかへつて、上野へいつて、格さんとみさん等と一盃ばいちのみたいもんだ」（慶応二年二月二四日）

「和英対訳辞書もはやはんぶんできあがりになつたとおもふ。こんや、まどまる」といふことばの処のあたりまで校正した。どれねてほんでもよもう」（二月二五日）

「○よる、よい月夜なり。○けふ英語をさきにして和語をひく方の字書がはじめて版になつてくる」（慶応三年三月六日）

「けふ、へぼん、Tクシヨナリの序を書く」（三月一五日）

「和英字書のうちへいれる為に、日本の仮名、万葉仮名、カタカナ、ひらがな、いろはの仮字五体の板下をかく」（三月二一日）

「てんき、おほよし。あたゝかすぎて、すこしあついくらゐなり。楊花如雪舞青空といふけしきなり。ゆうべ蚊が出たから、けふ、かやをつる。けふ、へボン、対訳辞書（デクシヨネリ）にあたらしく名をつけてください、ほんのとびらがみにかくやうに、よい名を、といふから、和英詞林集成とつける」（三月二三日）

「雨ふる。和英語林集成のとびらがみのはんしたをかく。雙鉤（註四九）でかいたが、よくできた。詞の字を語に改めて、いちりんねあげをした。へぼん、だら五十枚くれる。これまで久しくほねを折て、此ほんを手伝て、こしらへたから、おれいにくれたるなり」（三月二五日）

★図四五……『和英語林集成』 「一八〇〜一八四頁参照」

☆註四九……雙鉤 文字を写す一方法。書かれた文字の上に薄い紙を乗せて輪郭を正確に写すこと。雙鉤（註四九）で書いた輪郭の中を墨で塗ることを雙鉤填墨（へてんぼく）と云う。

へボンの辞書の書名は『和英語林集成』（註四五）ですが、最初は『和英詞林集成』と名付けていたことがわかります。吟香は詞（四）の字を語（五）に替えて一厘（林）値上げしたと冗談をいっています。

へボンは一八六六年一二月七日付のウォルター・ラウリー宛書簡に美華書館の作業のことを記していますので、『へボン書簡集』（高谷道男編訳）から該当部分を抜いてみましょう。

「印刷の仕事はゆっくりしております。ガンブル氏の印刷技師としての腕前と天分が

なかったら、全くできなかったでしょう。これまでのところではあらゆる障害を超えることができたのです。彼が最も美しい日本語の活字を銅製の母型に作り、一揃いの日本語の活字を鋳かためた（引用者註、鋳造のこと）のです。英語の大文字（引用者註、スモ、イルキヤップ）、アクセントのついている母音や、イタリックなどが無いし、また上海でそれらを得ることができないので、ガンブル氏自ら母型を作って、必要なだけを鋳かためました。これだけお話ししたら、印刷がどれ程むずかしいものかがおわかりになるでしょう。このために一ヶ月以上を費やしたのです。わたしどもは着々と仕事を進めております。僅か活字をならべるだけに五人の植字工を使って、二日に八ページの印刷をしあげたいと思っております。やっと四十ページおわり、A・BとCの一部ができたわけです」

この手紙ではCの一部まで四〇頁ができたと書いています。『和英語林集成』の四〇頁目は「CHI-KEMURI」（チケムリ、血煙）からはじまり、「CHIN-DZRU」（チンズル、陳）で終わります。印刷に必要な活字の準備に一ヵ月以上をかけたといっていますので、印刷開始は一月二七日前後になりましたか。岸田吟香の一月二五日の日記では「まどまる」まで校正したとありましたが、「まどまる」は二六〇頁にあります。校正刷りで校正したのち活字を差し替えて正式の印刷にかかりますので、一日にそれほど多くは印刷できないと思います。ヘボンが一月二五日付私信で「辞書は目下、一日六ページの割で印刷中です」と書いています。この時点から印刷完了までは三ヵ月以上かかるとみても間違いないと思います。できあがった辞書二冊（未製本です）を携えてヘボンと吟香が日本に戻ってきたのは一八六七（慶応三年五月）です。上海滞在はほぼ七ヵ月に及びました。

ヘボンの手紙の日付はあたりまえですが太陽暦を使っています。岸田吟香のほうは旧暦で書いていると思うのですが、印刷の進行状況と日記の内容を合わせて考えると、もしかする

と太陽暦で書いているのではないのでしょうか。

参考とする先行文献がなかったため『和英語林集成』の見出し語は、ヘボンが日常会話や読書から収集したと書いています。ヘボンは船の中で覚えた日本語「コレハナンデスカ」を連発したのでしょうか。ここで思い出しましたが、金田一京助博士がアイヌ語の収集を始めるとき、アイヌの子供達にめちゃくちゃなものを書いて見せ、これはなにかという言葉を引き出し、それを覚えて連発したという話しを読んだ記憶があります。

望月洋子氏は自著『ヘボンの生涯と日本語』の中でこの辞典の特長を次のように書いています。

「和英の部の見出し語はローマ字で掲げ、片カナと漢字を並べ、用言には活用を簡単に示し、品詞を記してある。ついで語の意味をやさしい英語で説明して引用例を示し、できるだけ同義語を加えるという方針をとっている。初版採用語は二万七百七十二。これから日本語を学ぼうとする外国人にはもちろん、日本人にも役に立つ、信頼しうる近代辞書の誕生であった」

初版は一、二〇〇部といわれています。判型は縦二六・六センチ横一七・五センチ、序文・凡例等一二頁、和英の部五五八頁、Indexと名づけられた英和の部一三二頁の堂々たるものです。出版費用を回収するために一冊一八両という高値でした。貧乏書生には高嶺の花の辞書はのちには一冊六〇両で取引されたとのこと。各藩は先を争って購入し、瓦解間近の幕府もこの辞書を大量に買ったようです。『和英語林集成』初版は明治改元後の早い時期に完売しました。

……「和英語林集成」A Japanese and English Dictionary with an English and Japanese Index J・C・ヘップバーン著、一八六七年刊、上海美華書館印刷。漢字による扉中央の雙鉤（フットライン）の書名は岸田吟香が日記に記したように、彼が書いた。扉の文字はすべて吟香の筆であらう。

慶 應 丁 卯 新 鑄

美國平文先生編譯

和 英 語 林 集 成

一千八百六十七年

日本横濱梓行

A TABLE OF THE JAPANESE KANA.

i	イ	ハ	バ	パ	ニ	ホ	ボ	ポ	ヘ	ベ	ペ	ト	ド	チ	ヂ	リ	ヌ
1	い	は	ば	ぱ	に	ほ	ぼ	ぽ	へ	べ	ぺ	と	ど	ち	ぢ	り	ぬ
2	伊	波	婆	巴	爾	保	菩	不	閉	弁	邊	登	度	智	地	利	奴
3	伊	波	婆	巴	爾	保	菩	不	閉	弁	邊	登	度	智	地	利	奴
4	伊	波	婆	巴	爾	保	菩	不	閉	弁	邊	登	度	智	地	利	奴
5	伊	波	婆	巴	爾	保	菩	不	閉	弁	邊	登	度	智	地	利	奴
ru	ル	ワ	カ	ガ	ヨ	タ	ダ	レ	ソ	ゾ	ツ	ヅ	子	ナ	ラ	ム	ウ
1	る	わ	か	が	よ	た	だ	れ	そ	ぞ	つ	づ	ね	な	ら	む	う
2	る	わ	か	が	よ	た	だ	れ	そ	ぞ	つ	づ	ね	な	ら	む	う
3	る	わ	か	が	よ	た	だ	れ	そ	ぞ	つ	づ	ね	な	ら	む	う
4	留	和	加	鶯	與	多	陀	禮	曾	釵	都	頭	禰	奈	羅	無	守
5	流	輪	香	鹿	代	田	駄	連	十	存	津	圖	根	名	樂	六	卯



# JAPANESE AND ENGLISH DICTIONARY.

## ABA

- Ā**, アア, 嗚呼. An exclamation or sigh expressive of grief, concern, pity, contempt, or admiration. — Ah! alas! oh! *Ā dō itashimashō*. Ah! what shall I do. *Ā kanashii kana*, alas! how sad. *Ā nasake nai*, oh! how unkind. Syn. SATEMO-SATEMO.
- Ā**, アア, 彼, *adv* In that way, so, that. *Ā szru* to do in that way. *Ā shite iru to h'to ni togamerareru*, if you do so you will be blamed.
- ABAI**—*au, -atta*, アハフ, *t.v.* To shield or screen from danger, to protect or defend. Syn. KABAU.
- ABAKE**,—*ru, -ta*, アハケル, 發, *i.v.* To break open of itself. fig. divulged, made public.
- ABAKI**,—*ku, -ita*, アハク, 發, *t.v.* To break or dig open that which confines or covers something else. fig. to expose or divulge a secret. *Tzuka wo abaku*, to dig open a grave. *Hara wo —*, to cut open the belly. *Kōdsi ga dots wo abaita*, the inundation has broken open the dike. *Inji wo —*, to divulge a secret. Syn. HIRAKU.
- ABARA**, アハラ, 肋, *n.* The side of the chest.
- ABARA-BONE**, アハラボネ, 肋骨, *n.* A rib.
- ABARA-YA**, アハラヤ, 敗宅, *n.* A dilapidated house.
- ABARE**,—*ru, -ta*, アハルル, 暴亂, *i.v.* To act in a wild, violent, turbulent or destructive manner; to be mischievous, riotous. *Sake ni yotte abareru*, to be drunk and violent. Syn. RAMBŌ SZRU.
- ABARE-MONO**, アハレモノ, *n.* A riotous mischievous fellow.
- ABARI**, アハリ, 網針, *n.* A bamboo needle used for making nets.
- ABATA**, アハタ, 痘斑, *n.* Pock-marks. Syn. JANKO, MITCHA.

A

## ABU

- ABATA-DZERA**, アハタツラ, 麻臉, *n.* Pock-marked face.
- ABAYO**, アハヨ, *interj.* Good bye (used only to children.)
- ABEKOBE-NI**, アベコベニ, *adv.* In a contrary or reversed manner, inside out, upside down. *Hashi wo — motsz*, to hold the chopsticks upside down, *Kimono wo — kiru*, to wear the coat inside out. Syn. ACHI-KOCHI, SAKA-SAMA.
- ABI**,—*ru, -ta*, アビル, 浴, *t.v.* To bathe by pouring water over one's self. *mids wo —*, to bathe with cold water. *Yu abi wo szru*, to bathe with warm water.
- ABI-JIGOKU**, アビヤゴク, 阿鼻地獄, *n.* The lowest of the eight hells of the Buddhists.
- ABIKO**, アビコ, 石龍, *n.* A kind of lizard.
- ABISE**,—*ru, -ta*, アビスル, 潑, *t.v.* To pour water over or bathe another. *H'to ni mids wo abiseru*, to pour water over a person.
- ABU**, アブ, 虻, *n.* A horse-fly.
- ABUKU**, アブク, 泡, *n.* Bubbles, froth, foam. *coll. for Awa.*
- ABUMI**, アブミ, 鐙, *n.* A stirrup. — *wo funbaru*, to stand on the stirrups, (in the manner of the Japanese.)
- ABUMI-SHI**, アブミシ, 鐙工, *n.* A stirrup-maker.
- ABUNAGARI**,—*ru, -ta*, アブナガル, *i.v.* Timid, fearful, apprehensive of danger. Syn. AYABUMU.
- ABUNAI**,—*ki, -shi*, アブナイ, 浮雲, *a.* Dangerous. *Abunai*, take care. *Abunai koto*, a dangerous thing. Syn. AYAI, KENNON.
- ABUNAKU**, or **ABUNŌ**, アブナク, 浮雲, *adv. idem.* *Abunaku nai*, no danger.
- ABUNASA**, アブナサ, 浮雲, *n.* The dangerousness.

AN INDEX;  
OR,  
JAPANESE EQUIVALENTS  
FOR THE  
MOST COMMON ENGLISH 英語 WORDS.

ABO

ABACUS, Soroban.  
 ABAFT, Ushiro-ni.  
 ABANDON, Szteru; hai-szru; yameru.  
 ABANDONED, Hōratsz.  
 ABASE *one's self*, Heri-kudaru; mi wo sageru. — *another*, tori-hishigu.  
 ABASH, Kao wo tszbusz.  
 ABASHED, Hadzkashii.  
 ABATE, Heru; gendzru; uszrogu; yurumeru; herasz; hesz.  
 ABBREVIATE, Habuku; hashoru; tszdzmeru; riyaku szru.  
 ABBREVIATION, Riyaku-ji.  
 ABDICATE, Kurai wo szberu; kurai wo yudzru; jōi szru.  
 ABDOMEN, Hara; fuku.  
 ABDUCT, Kadowakasz.  
 ABHOR, Kirau; iyagaru; nikumu.  
 ABIDE, Szmu; oru; jū-szru.  
 ABILITY, Chikara; kiriyō; chiye.  
 ABJECT, Iyashii; gesen.  
 ABJECTLY, Iyashiku.  
 ABLE, Dekiru; yeru. *Not able*, Dekinu; atawadz.  
 ABLE-BODIED, Jōbu-na; szkoyaka.  
 ABOARD *ship*, Fune ni oru.  
 ABODE, Szmai; iye; uchi.  
 ABOLISH, Yameru; hai-szru.  
 ABOMINABLE, Nikui.  
 ABOMINATE, Nikumu; kirau.  
 ABORIGINES, Dojin; moto no h'to.  
 ABORTION, Riu-zan; datai. *To cause abortion*, ko wo orosz; *or*, ko wo nagasz.  
 ABOUND, Tak'san; tanto.

A 1

ABU

ABOUT, Mawari; gurai; tai-tei; bakari; achi-kochi; *see also under*, kakari, wo.  
 ABOVE, Wiye-ni; yo; koyeru; amari; szgiru; migi.  
 ABOVE-BOARD, Omote-muki-ni; muki-dashi-ni; meihaku.  
 ABRADE, Szri-muki; szri-yaburu.  
 ABREAST, Narabi; mukau.  
 ABRIDGE, Habuku; tszdzmeru; riyakuszru; tszmeru.  
 ABROAD, Soto; yoso.  
 ABROGATE, Yame-saseru.  
 ABRUPTLY, Totsz-zen; sotszji; sotsz-zen.  
 ABSCESS, Hare-mono.  
 ABSCOND, Chikuten szru; nigeru; tachinokeru.  
 ABSENT, Inai; oranu; rusz.  
 ABSENT-MINDED, Mu-chiu; uchōten; uwanosora.  
 ABSOLVE, Yurusz.  
 ABSORB, Szi-komu; hikkomu.  
 ABSORBED IN, Kori-katamaru; hamaru; shidzmaru; fukeru; szsamu.  
 ABSTAIN, Tatsz; imu; imi-kirau; shō-jin szru, hikayeru.  
 ABSTINENCE, Mono-imi. *Religious* —, Shō-jin.  
 ABSTEMIOUS, Shu-shoku wo hikayeme ni szru.  
 ABSTRACT, *v.* Nuku; nuite toru.  
 ABSTRUSE, Fukai.  
 ABSURD, Higa-koto; sakashira; ri ni somuku; tszmaranu.  
 ABUNDANCE, Yutaka.

# へボン, 対訳辞書として はじめて 日本語を左横組にする

◎タイ。ボグラフィの面からこの辞書を見てみますと、驚くような処理がなされています。対訳辞書を見慣れた今の人にはなんの違和感もないと思うのですが、左横組です。当時の人々には日本語左横組は想像の外であったはず。縦組で右から左へ綴るのがあたりまえであった時代に、自分達の常識とはかけ離れた左横組のこの辞書をどのような思いで眺め、頁を繰って語彙を調べたのか、印象を聞いてみたい欲求にかられます。しかし「なんだか変でござるのう」と思いながら、語彙を引くほうに夢中になって組み方向は気にならなくなっていたのではないでしょうか。

また余計なことを思い出しました。国語辞典、縦組があたりまえとっていますが、株式会社三省堂は一九九一年五月日本最初の横組の国語辞典である『デイリーコンサイス国語辞典』を刊行しています。はじめて手に取ったとき、新鮮さとともにあれっという印象をもったことを覚えています。

またまた横組と言えば思い出すのは、昔の映画やテレビ番組の「遠山の金さん」のお白州の場面、最後の最後に片肌を見せて「この桜吹雪が見えねえか」。

カッコよく見栄を切る金さんの後ろに見える扁額はいつも「至誠一貫」です。これは右横書きですが、一字四行と理解すべきで意識は縦書きです。

へボンは原稿を横組で書いています。高谷道男編訳の『へボンの手紙』の中の、一八六五(慶応元)年八月二〇日付の弟スレーター・ヘップバーン宛私信には次のような文章があります。

「辞典の編集は着々と進捗しています。それは大きい働きです。わたしを助ける既刊の参考書もなく、開拓的な仕事ですから。わたしの考えとしては立派な著作になると思います。最初に日本語をローマ字で書き、ついで、おなじ意味を漢字で横書きにします。

漢字は日本では中国とはほとんど同じように用いられています。会話の一部——定義は、

★図四六……『和訳英辞書』English and Japanese Dictionary 薩摩学生著 一八六九年刊 上海美華書館印刷

判型は縦二四・七センチ横一七センチ、七〇〇頁。序には第三版を意味する「改正増補」とある。これは文久二年堀達之助等による『英和对訳袖珍辞書』を初版、それを改訂した慶応二年堀越亀之助等編の『改正増補英和对訳袖珍辞書』を第二版とするが、英語を学ぶものにとってもまだ飽き足らぬところがあるので、アメリカ人教師などの力を借りて改訂したのが『和訳英辞書』であるという。薩摩学生とは薩摩藩の高橋良昭前田正毅・正名の兄弟、海外留学の費用を捻出するためにこの辞書を編纂したもので、三名はのちに洋行を果たした。なお序文末尾にはウイリアム・ギャンブルへの謝辞がある。【一八七〜一八九頁参照】

意義と用法を説明するために日常会話の文かまたは書物から引用して、最後に同義語を書きました。同義語はご承知のように広範囲にわたるもので、かなり労力と研究を要します。」

ヘボンの手書き原稿は高谷道男の著作に凶版として使われていますが、すべて横書きで書かれています。美華書館は原稿どうりに組んでいきました。一頁あたりの組版代は二ドルです。『和英語林集成』が刊行されて二年後、日本薩摩学生の『和訳英辞書』が美華書館で印刷されました。★図四六 見ていただくとうかがいますが、見出しの英字と品詞はあたりまえですが横組で、日本語訳は縦組になっています。これが江戸時代の対訳辞書の一般的な組み方です。欧米人は「英語やオランダ語に縦組はありません」というでしょうし、日本人は「わが国の文字には蟹が歩くが如き横綴りなどござらぬ」とつぶねるでしょう。だから英字は横組になり日本語は縦組にするほかありません。

ではヘボンは和欧混植の左横組を強い意思で行ったのでしょうか。ヘボンにとって日本語が縦組であることを知っていたとしても、縦組にこだわることなく、自分がいつも書いている横組をごく自然に使い日本語もそれに合わせたのだと思います。それにたいして薩摩学生は日本語を横組にするなど想像すらしたこともなく、今まで見ていた対訳辞書のスタイルをそのまま踏襲したにすぎません。

和欧混植の組方向が横組に定着したのがいつであるのかわたしにはわかりません。そこで辞書の研究で大きな成果をあげておられる境田稔信さんにお尋ねしましたところ、辞書蒐集家で研究者物郷正明の著作を調べてくださいました（物郷コレクションは、（没後散逸しました））。境田さんは明治二一年以降に日本語横組が多くなってきたことから、この年が横組への転換点ではなかったのでしょうかとおっしゃっておられます。

## 改正増補和譯英辭書序

皇國ニ英學ノ行ハル、ハ他ニ非ラス所謂彼ノ長ヲ取り我ノ短ヲ補ハンカ爲ナリ其長ヲ取り短ヲ補ウハ皇化ヲ萬國ニ輝カサンカ爲ナリサレハ其行ハル、ハ其意ヲ詳ニシ其解ヲ精シクセテハ得アランコトナリ今書ヲ作ルモ皆此コ、ロニ依ラサルハナシコレヨリ先ニ堀先生英ノ字典ヲ譯スルニ我

皇國ノ語ヲ以テシテ此學ニ志マル者ノ羽翼トセリシカレトモ往、謬語欠字等アリテ且遺漏ナキニシモ非スサルヲ堀越先生其謬誤ヲ改メ畧語ヲ加ヘタリハシメニ比スレハイトヨロシクハナリタレト學者ノ輩ニハ猶アカマ所アルヲ以テコノタビアメリカ教師等ニ倚リ更ニ改メ正シ今世不用ノ英語ヲ省キ必用ノ文字ヲ補ヒ加ヘ且口調ヲ誤ランカ爲吾片假名ヲホトリニ屬ケ又吾漢字ニモ施シテ童蒙ニ便宜ヲ得セシメサテコノ書ノ要トスルモノハ徒ニ英文ノ解譯ト我通辭ニ利アルノミニ非ラス當時要用ノ語ヲ増加シタレハ頗ル學者ノ遺漏ヲ減スト爾云

明治二歲己巳正月

日本

薩摩學生

明治二歲 己巳 正月

和訳英辭書

一千八百六十九年新鐫



★図四七……『語学独案内』 明治八年刊、初編は印書局、二編三編は日就社の印刷、日就社は読売新聞の発行元、版型は縦一七センチ横一七・四センチ、初編三五二頁、二編二七一頁、三編三四九頁、Index 二九頁。【一九二〇一九七頁参照】

☆註五〇……スモールキャップ（スモールキャピタル small capital） ローマン体小文字のxハイトの大きさに作る大文字。『印刷字典』によれば、文章中、特に注意すべき箇所、あるいは表題・人名・地名・柱・口絵・挿絵の説明に用いるとある。  
ヘボンの手紙からこの辞書のために新刻したもので、美華書館はこのときまでスモールキャップの活字を持っていなかったことがわかる。

欧文は横組と日本語は縦組という異なる文化のせめぎ合いの中で、数々の試行錯誤が行われたであろうことは想像に難くありません。対訳辞書に日本語左横組が受け入れられるまでに、明治改元後二〇年という時間が必要だったのです。しかしこの二〇年が長いのか短いのかわたしにはわかりません。

今手元にある資料の中で、過渡期の姿を示す興味深いものに明治八（一八七五）年刊行の『語学独案内』<sup>★図四七</sup>があります。本書は左に英語で文章を、右にその日本語訳を掲げてありますが、日本語は一行ですむ場合は右横書きです。訳文が一行では終わらない場合、たとえば訳文が二行になるときは一行二字詰の縦組で右から左に綴っています。英語の文章が長くなれば訳文も長くなり一行三字詰、一行四字詰となり、ときには一行八字詰もできます。使用活字は五号で、右横書き一行の場合は字間二分アキ、複数行のときは字間ベタ組、行間二分アキです。漢字はすべてにルビを振っていますので二行縦組は横組に見えます。

活字の話しができましたので、『和英語林集成』の活字<sup>☆註五〇</sup>について見てみましょう。見出しの単語は英字で、最初の文字は大文字で次からはスモールキャップ<sup>☆註五〇</sup>で組んであります。次のその語のカタカナ表記と漢字、そのあとにイタリックで品詞を示し、単語によってはイタリックで訓読みを置き、最後にその意味を英文で綴っています。見出し語の英字表記はのちにヘボン式ローマ字と呼ばれる<sup>☆註五一</sup>ものです。

漢字はウイリアム・ギャングブルの発案になる、木彫種字を使った電胎母型から鑄造されたスモール・パिकासイズ（<sup>イント</sup>）<sup>（一一ポ）</sup>で、英字と同じサイズです。

この漢字活字は一八六四年には完成していたもので、日本の漢字活字はこのスモール・パिकासの漢字活字を複製することから始まったことはすでに述べました。

ここに組まれているカタカナは、これ以前の美華書館の印刷物に使われてはいませんので、『和英語林集成』を組むために新しく鑄造されたものと思われます。字形の美しさから見て

☆註五一……へボン式ローマ字 『和英語林集成』初版の見出し語を綴るためのローマ字表記がもとになり、のちに整備された。

初版の主な綴りは、

sa	shi	sz	se	so
ta	chi	tsz	te	to
wa	i	u	ye	wo
za	ji	dz	ze	zo
da	ji	dz	de	do

今日「円」を「yen」と表記するのはこのときの名残である。へボンは『和英語林集成』第二版で sz, tsz, dz を su, tsu, dzu と改める。

明治 18 (1885) 年「羅馬字会」はへボン式ローマ字綴りを採用し整理した。『和英語林集成』第三版はこの修正に従っている。

a	i	u	e	o			
ka	ki	ku	ke	ko	kya	kyu	kyo
sa	shi	su	se	so	sha	shu	sho
ta	chi	tsu	te	to	cha	chu	cho
na	ni	nu	ne	no	nya	nyu	nyo
ha	hi	fu	he	ho	hya	hyu	hyo
ma	mi	mu	me	mo	mya	myu	myo
ya	i	yu	e	yo			
ra	ri	ru	re	ro	rya	ryu	ryo
wa	i	u	e	o			
ga	gi	gu	ge	go	gya	gyu	gyo
za	ji	zu	ze	zo	ja	ju	jo
da	ji	zu	de	do	ja	ju	jo
ba	bi	bu	be	bo	bya	byu	byo
pa	pi	pu	pe	po	pya	pyu	pyo

へボン式表記に反対しているのは科学者でローマ字論者田中館愛橘(たなかだてあいきつ)等で、その主張は日本式ローマ字綴りである。へボン式と異なるところはつぎの通り。

sa	si	su	se	so	sya	syu	syo
ta	ti	tu	te	to	tya	tyu	tyo
ha	hi	hu	he	ho			
ya	(yi)	yu	(ye)	yo			
wa	wi	(wu)	we	wo			
da	di	du	de	do	dya	dyu	dyo

昭和 12 (1937) 年 9 月 21 日内閣訓令第三号によるローマ字綴りでは、

ya	i	yu	e	yo			
da	zi	zu	de	do	zya	zyu	zyo

(za 行の濁音も同じ)

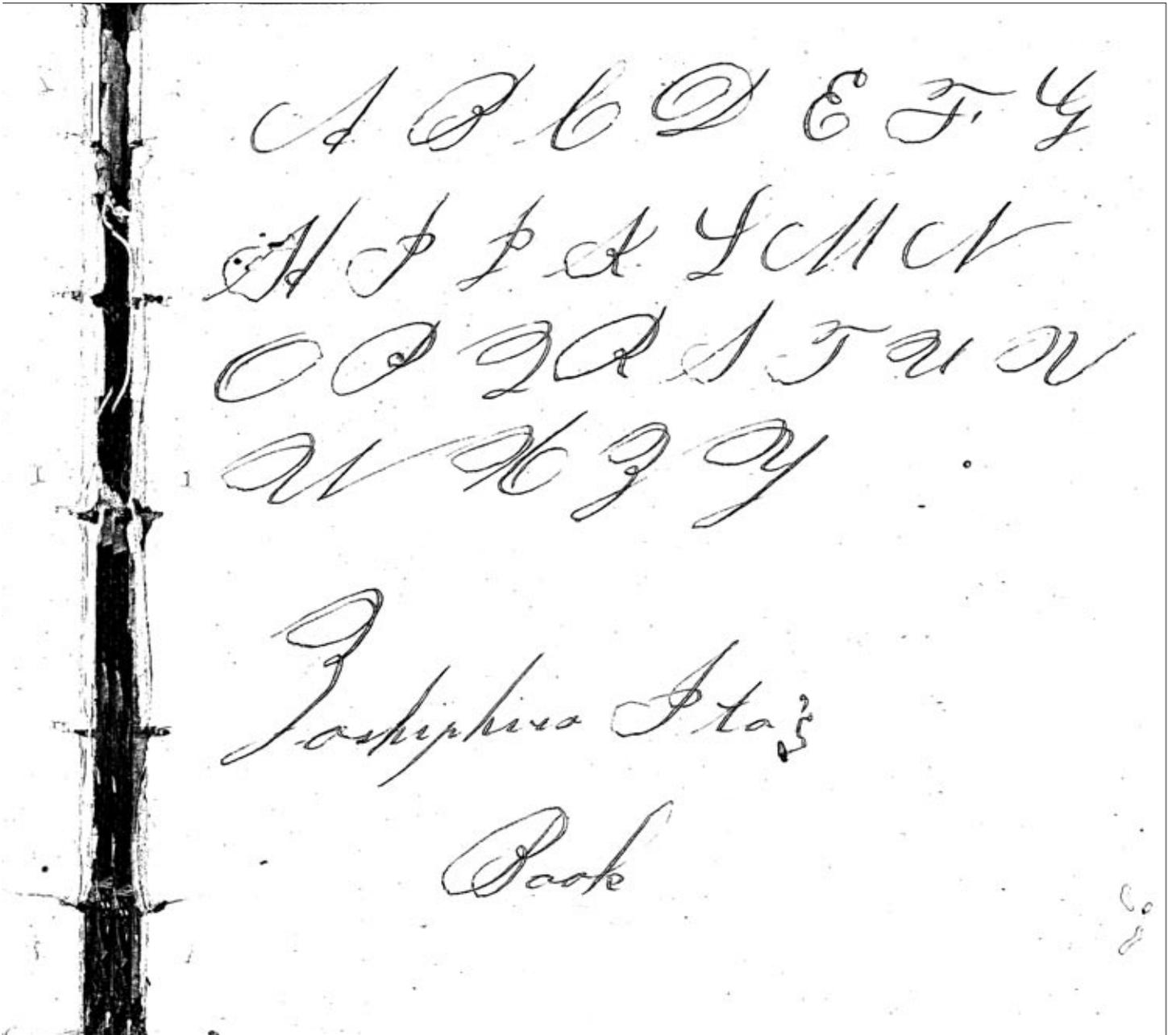
と変わる。

日本人の手になることはわかりませんが、しかし誰がこのカタカナの版下を書いたかはわかりません。岸田吟香である可能性はすてきませんが、彼の『吳淞日記』の前半部分が失われているためにこの間の事情がわからないのです。

カタカナは漢字にたいして字面がすいぶん小さく作られています。細かい分析はまだ試みていませんので、カタカナを大きく作るのには近い最近のことです。細かい分析はまだ試みていませんので、はっきりしたことはいえませんが、見た印象では活字の大きさ(方向)はスモール。パイカサイズですが、活字幅(左右)は狭い。活字表面は長方形のようです。漢字活字のように正方形のボディにしますと、英字や漢字より小さくなりますので上下にインテルを入れなければならず、組版は煩雑になります。ですから活字幅はすべて同じだと思えます。組版を見ていると行末を揃えるためかカタカナの字間が同じ字でも少し違ってきます。たぶんここに薄い込め物(スペース)を入れて調整しているのでしょう。しかしもしかすると何種類かの活字幅を持っている可能性も排除できません。欧文活字は文字によって活字幅が異なることは当然です。カタカナにそのシステムを

応用しようという発想が起きていても不思議ではありません。

同一頁の中の同じ漢字活字でも、偏と旁を作字しているものが混在しており、漢字の中には活字ケースに収容されている数が少ないものがあることがわかります。ギャンプルが行った使用頻度調査の結果から活字ケースに入れてある活字数が違うのでしょう。



★図四七一……「語学独案内」扉。  
右頁にEのサインとペンで書いたアルファベット

英國砲隊士官  
ブリンクリ氏著

# 語學獨案内

初編

明治八年  
印行  
印書局



★図四七―二……「語學獨案内」扉。  
一九二頁★図四七―二の左頁

米  
流  
植  
電  
光  
電  
虹  
譯  
賣  
口  
賣

快  
涼  
魯  
可  
活  
ヒ

雨  
雪

Famines are scarce  
We seldom have famines } of late years.

I { sometimes go there } for a chat.  
go there sometimes }

He often makes mistakes in { his calculations.  
calculation.

He is never at home these times.

The weather is generally fine after a storm.

Men of noble birth seldom { become great  
Few men of noble birth } scholars.

That child is always crying.

You are always talking nonsense.

Do you ever meet Mr. Jo { now-a-days ?  
these times ?

Does the snow ever lie at Yokohama?

ヒ ナ 少カ 饑ハ 年近

マ 参話シヘ 彼折私  
スリニ 談所節ハ

ダ ル フ 當チヤハ 彼  
人トス 運算度人

セ ヒ ナ 居ニ 向今ハ 彼  
又 マ サ デ ハ 家一當人

ス ヒ ヨ 晴例ハ ノ 大  
マ ザ デ 快通跡風

ヒ 少者ニ 學高ハ ノ 貴  
ナガ 成者トヒ 名人族

ル 居リ カ バ テ 泣終始ハ 兒彼

ル 居テ 云ツ 痴愚モ ツ イ ハ 汝

カスマヒザゴカ 逢御ニ 君城節當

カルアガール 積ノ 雪ハ デ 濱横

詞名

Mosquito. mōs-kē-tō.	ウトイキスマ	蚊	Middle. mīd'ḡl.	ルドニ	中	第
Report. rī-pōrt'.	トルウボリ	噂	Middle of the day.		中	日
Man of war.		艦軍	Number. nūm'bdr.	ルバムナ	數	七
Shipwreck. shīp'rēk.	シレブシ	船難	A number of.		ノ	多
Earthquake. ɛrth'kwāk.	シイクスルア	震地	A great number of.		ノ	山

★四四七—三……「語学独案内」本文。

199

Side. sid. アイサ	側 <sup>か</sup> の傍 <sup>わき</sup>	America. 4-mér-í-ká. カリメア	國 <sup>くに</sup> 米 <sup>こめ</sup>
Hemp. hēmp. プムヘ	苧 <sup>お</sup> 麻 <sup>あ</sup>	Epidemic. ép-í-dém-í-k. クミデピエ	病 <sup>びょう</sup> 流 <sup>りゅう</sup>
Governor. gāv-ār-nār. ルノルバガ	事 <sup>こと</sup> 知 <sup>ち</sup> の役 <sup>やく</sup> 圖 <sup>ず</sup> 差 <sup>さ</sup>	Shrub. shrāb. プラシ	木 <sup>き</sup> 植 <sup>え</sup>
New moon.	月 <sup>つき</sup> 新 <sup>あたら</sup>	Lightning. lit-nīng. グンニトイラ	光 <sup>ひかり</sup> 電 <sup>でん</sup>
Full moon.	月 <sup>つき</sup> 満 <sup>み</sup>	Flash. flash. シラフ	リ光 <sup>ひかり</sup>
Europe. yū-rōp. プロウユ	洋 <sup>やう</sup> 西 <sup>せい</sup>	Flash of lightning.	掣 <sup>ひら</sup> 電 <sup>でん</sup>
Proclamation. prōk-kīā-mā-shūn. ヌシイメラクロブ	觸 <sup>ふ</sup>	Rainbow. rān-bō. ウボンイレ	靄 <sup>あや</sup> 虹 <sup>にじ</sup>
Lock. lōk. クロ	錠 <sup>じやう</sup>	Reason. rē-z'n. ズイリ	窟 <sup>くわ</sup> 理 <sup>り</sup> の譯 <sup>やく</sup>
Gate. gāt. トイゲ	門 <sup>かど</sup>	Demand. dē-mānd'. フンマデ	取 <sup>と</sup> の言 <sup>こと</sup> 賣 <sup>う</sup> 立 <sup>た</sup> 立 <sup>た</sup> 口 <sup>くち</sup>
		Be in demand. 宜 <sup>よろ</sup> ガキ向 <sup>むか</sup> のルアガ口 <sup>くち</sup> 賣 <sup>う</sup>	

詞<sup>ことば</sup>容<sup>よう</sup>形<sup>かたち</sup>

Interesting. ín-tēr-ēs-tīng. グンテスレトンイ	面 <sup>おもて</sup> 白 <sup>しろ</sup>	Charming. グンミルヤチ	ス悦 <sup>よろこ</sup> 目 <sup>め</sup> 快 <sup>こころ</sup>
Splendid. splēn-dīd. フデンレブス	ナ派 <sup>は</sup> 立 <sup>た</sup>	Cool. kōōl. ルウク	キ涼 <sup>すず</sup>
Different. dīf-fēr-ēnt. トンレフデ	ノ別 <sup>わか</sup> ル <sup>る</sup> タ <sup>た</sup> 異 <sup>ちが</sup>	Russian. rūsīān. ヌシラ	ノ國 <sup>くに</sup> 魯 <sup>ろ</sup>
Fall. fāl. ルフ	ル夕 <sup>ゆふ</sup> 満 <sup>み</sup>	Resemble. tēr-rī-b'l. ルヒリテ	恐 <sup>おそ</sup> 可 <sup>おそ</sup>
		Vivid. vīv-īd. フヒビ	{ ルタシトヤ <sup>あ</sup> 活 <sup>い</sup> ノリ光 <sup>ひかり</sup> ヒ <sup>ひ</sup> フヒ

詞<sup>ことば</sup>働<sup>たら</sup>

Clear. klēr. ルアリク	ル晴 <sup>は</sup>	Rain. rān. ヌイン	ル降 <sup>ふ</sup> 雨 <sup>あめ</sup>
		Snow. snō. ウノス	ル降 <sup>ふ</sup> ガ雪 <sup>ゆき</sup>

★四四七—四……「語学独案内」本文。

Fan  
We  
I {  
He  
He  
The  
Men  
Few  
sc  
Tha  
You  
Do  
Doe  
—  
Mos  
Rep  
Man  
Shij  
Earl

道へ銀役所へ死地球ノ表面へ横此丸條ヲ三平行線ヲ以テ南又子午線ハ此トハ違

Well, the whole globe was originally in a state of incandescence, but the surface heat being gradually given off, a depth of about twenty two or twenty three miles has solidified, and the rest is burning as before. Earth, however, being a bad conductor of heat, it's presence prevents the internal heat from coming to the surface.

Putting on those airs of knowledge, and discoursing of those marvellous things, is simply showing off one's own cleverness.

However well steamers may be supposed to sail against the wind, having a fair wind or a foul wind must make some difference in their speed,

That is not worth mentioning.

Under those circumstances, you were quite justified in doing so and so.

The government was quite justified in refusing to pay the money.

He is very well read in fortification.

He cannot bear to give in, can he?

There is nothing in the world so much to be dreaded as the tongue; the best men are often made guilty, for the moment, in the mouths of the wicked.

Who are the officers engaged in this affair?

Buying things at that shop makes one feel, somehow, as if they were forced upon one.

ナ火土モヤ失里治々居來左  
イ氣ノアハイ張計發カタハ  
デ外ノアルハ末計發カタハ  
ゴ面ハルハ火ス燃ハ深カ  
ヤヘニ爲ニ強土居ノ深カ  
イハ内モト申テ後ハ  
マ發面ノデスゴハ三

ダ而人ノ結仕  
已ニ知局掛  
ノ示書自  
事コスフ分ハ

ル遅チ順カハル向船何  
ダ速少風ラ申モテハ程  
ロガ々々ニ逆レノモ風蒸  
フアハ依風ナト走ニ氣

スマイザゴデ、イナモデマ云ハ夫

マヤデトモハ、タスヲ何ナレイゴ譯イ  
スイゴモツ御、ノツナ々ニラタマザデフ

ツ、モツハ、タ申、スサハ、金、デ、政  
タダナトモノシトレ、渡、子、其、府

タ人、ル居、ガテシ、熱、ニ、書、城、築、ハ、人、彼

子イ強、ガミ惜、負、ハ、方、彼

ノカニ一善ハ先、人ハ恐、頭、世  
ダア落、時、人、下、ニ、ノ、ナ、イ、ホ、上  
ルルハ、デン、掛、舌、イ、モ、ド、ニ  
モ、フ、非、モ、ナ、チ、フ、ノ、悪、ノ、可、舌

スマイ、ヤ、ゴ、デ、方、何、ハ、掛、御、此

ルガ心、様、レ、ヲ、押、ダ、ナ、ノ、ヲ、デ、ノ、彼  
ス持、ナ、ル、サ、賣、カ、ン、ハ、買、物、店、所



# いまも デザイナーやタイポグラファーを 悩ます和欧混植

◎ヘボンの『和英語林集成』は、同一ボディサイズ内に異なる言語文字を鑄造し、それを混植するという前例を作りました。日本は美華書館の活字をそのまま導入しましたので、この方法を継承しています。金属活字は足し算だけで成り立つシステムですから、組版にはとても都合がよかったです。これがのちに和欧混植に大きな問題を投げかけるとはギャンプルもヘボンも岸田吟香も思いもよらなかった。

世界との関係が深くなるにつれ、日本語組版の中に欧文が入ってくる頻度は確実に高くなり、今まで見えなかった混植時の欠陥が目につくようになり、デザイナーやタイポグラファーは解決策を求めて四苦八苦するようになりました。デザイナーやタイポグラファーが求めている理想的な混植とは、

- 一、日本語活字と欧文活字のスタイルが似ており違和感を感じさせないこと
- 二、日本語活字と欧文活字が、見た感じの大きさと太さで調和すること

の二点だと思います。デザイナーやタイポグラファーの多くは従属欧文を使わず、外国製の欧文フォントを日本語書体と組み合わせて使うことが多いようです。その理由は従属欧文の品質の問題なのでしょう。書体デザインを本業とする私が漠然と感じていることですが、この方法で右に書いた理想の混植が可能か、ということですね。異なる時代、地域、目的、方針で作られた書体を組み合わせるとき、違和感なく調和すると信じる人はいないのではないのでしょうか。時として、スタイル、大きさ、太さが合う場合があるかもしれませんが、それはあくまで偶然の産物であって、偶然に頼っているのは書体デザインやタイポグラフィの問題としての根本的な解決にはならないと思うのです。

金属活字時代、混植について「相互に一点の類似性のない欧文書体が、木に竹を接いだ様

に邦文の中に混用しているのは、頻々と目に触れる例であるが、まことに見苦しいかぎりである」と発言したのはプライベートプレス嘉瑞工房かすいこうぼうを主宰する井上嘉瑞いのうえよしみつです。昭和一六（一九四二）年の発言ですが、調和融合する書体を選べという意見は今でも充分に通用します。印刷博物館の近く新宿区西五軒町に、井上嘉瑞の衣鉢を継ぐ高岡重蔵たかおかじゆうぞうさんの活版印刷所嘉瑞工房があります。高岡さんは金属活字による混植の問題点を早くから指摘しておられ、論文「和欧活字の混ぜ組み」（『欧文活字とタイポグラフィ』所収）の中で、実際に活字で組み分け六七例を示して解説しています。高岡さんが和欧混植の不調和感を作り出す要因としているのは、

一、和文と欧文活字の文字線（字づら）の黒みの違い

二、和文と欧文の文字線の筆法の違い

です。わかりやすい言葉に置き換えれば、ライン・ウエイト・スタイルの違いが調和を妨げる要因である、ということでしょう。たしかに高岡さんが指摘される三つの要因が異なる言語書体の混植につきまとう問題点で、これをクリアすればよりよい混植になることはいくらでもありません。これも今でも充分に通用することです。

日本語書体と欧文書体を横組みで混植しますと、欧文は上にあがってどうしても視線を乱します。日本語書体がボデイのほぼ中央に文字の重心を揃える重心システムで、いってみれば焼き鳥の串と肉の関係です。串が重心の通る線で、それに大小様々な大きさの肉がついていたとしても並んで見えます。それにたいして欧文はベースラインを基本線とする四本の線上に整理するラインシステムで、重心という意識はありません。この相異なるシステムを同じボデイの中で処理すれば、基本線をベースラインとする欧文はあがってしまいます。特にオールドスタイルの書体は、デイセクターが長いのでベースラインは高くなります。

ウエイトを感じさせる要素には大きさと太さがあります。欧文書体の見えの大きさはxハイトで決まります(同じポイントサイズで正統的スクリプトたどえばバンクスクリプトど、センチユリーローマンを組みくらべてみますとすぐわかります)。日本語書体とくに漢字と同じ大きさに見せようとするれば、キャップハイトとxハイトを大きくするほかありませんが、欧文はデイセンターがありますので同一ボディサイズ内での処理はむずかしい。太さについては、欧文書体はべつに日本語書体に合わせて作られたわけではありませんので、合うはずはありません。

スタイルは近似という許容範囲内で判断されますので、ラインやウエイトよりクリアできる可能性は高いと思われませんが、字形がまったく違いますので同じスタイルに作るということとはできません。

高岡さんは次のような補正方法を考えます。和欧同一サイズを使う場合は和文活字の下にインテルを入れ、欧文活字は上にインテルを入れてラインを補正するか、あるいは一サイズ大きい欧文活字を使うかですが、ともに組版を煩雑にするだけで、特に前者は「労多くして実の少ない結果に終る」と嘆息が聞こえるような文章を記しています。そして「たとえば九ポイントの母型を八ポイントの鋳型で鋳込み、デセンダの部分を活字の腹側(引用者註、活字表面を正面に見て下の面)に飛び出させて、これを用いればいちおう解決する」としていますが、技術的に可能かどうか私にはわかりません。しかしこの発言は、常に問題となるデイセンターの処理について、同一ボディ内でのデザインではなく、和文と欧文でボディのサイズを変えてデザインしなければならぬという示唆ととらえることができるのではないかと、私は感じました。金属活字はボディという実体を持っていますので、金属活字ではこの処理は難しいのですが、次の文字生成システムである写植がこの考え方を敷衍して混植への対応を考えていけば、今デザイナーやタイポグラファーを悩ましている問題のある部分は解決していたと思われるかもしれません。

## 前時代のシステムを踏襲した 写植書体

高岡さんが示した六七例の混植は、問題点を露出するだけに終わっているように見えます。金属活字は同一言語書体だけで文字情報が処理できた時代のものであったのでしょうか。

◎次に出現した写植は、金属活字が持っていたボディはなく、あくまでボディは「仮想」の存在です。実体のあるボディというくびきから解放された写植システムは、多言語の混植を可能にするものであったのですが、その全盛期にあっても混植が今ほど重要視されず、必要性が声高に叫ばれなかったという事情があったとしても、金属活字のデザインシステムをそのまま踏襲し、次世代の新しい文字組のシステムへの模索と構築を図らなかったように思えてなりません。

新しい技術といえども、前時代の考え方を引きずってしまうものなのでしょうか。

一九七五年に株式会社写研が刊行した『組みNOW―写植ルールブック』には、混植のための基本ルールが六項目掲げられています。

- 一、和欧文を混ぜ組みにしたときには、欧文だけが極端に黒くならないような書体を選ぶ。
- 二、ひらがなの構成や太さに近いカーブやウエイト（太さと黒さ）を持つ欧文書体を用いる。
- 三、ひらがなの起筆、終筆に近いセリフを持つ欧文書体を用いる。
- 四、エックスハイト (x-height) の比較的大きい欧文書体を用いる。
- 五、小文字の a から z までの長さ (az length) が、比較的長い欧文書体を用いる。
- 六、以上から、一般に、明朝体に対しては、黒さのあったオールドスタイルを、ゴシック体に対しては、黒さのあったサンセリフを用いると無難である。

# デジタルフォントは 多言語混植を可能にする

写植メーカーが示した注意は、大きさも含めたウエイトとスタイルが近い書体を選べば無難というだけで、重要なラインの調和については記されていません。

金属活字のデザインと同じように、同じ原字用紙を使って混植用の欧文書体をデザインすれば、横組みのラインを考えるとどうしてもディセクターを狭くするほかありません。まことに美しくないプロポーションを持つ従属欧文が嫌われる第一の理由がここにあります。従属欧文を使わず外国で作られた書体を使うとウエイトとラインで頭を悩ますことになります。

欧文書体を混植するとき、文頭が大文字でありディセクターの文字が少しでも入っている単語あるいは短文ならば、書体の選択を誤らなければある程度納得できる組みになるかもしれません。しかしすべて小文字でディセクターの無い単語あるいは短文であったとしたら、大きさとラインで破綻してしまいます。級数を上げれば他の欧文とウエイトで狂いが出ます。大文字だけであつたら級数を少し上げて、単語あるいは短文を少し下げることウエイトとラインを調和させることも可能かもしれません。しかしこれらの補正は根本的な解決にはならず、ただの小手先だけの一時しのぎにすぎないものです。

◎デジタルフォントの創成期は、写植が金属活字のデザインを踏襲したように、写植のデザインを踏襲することから始まったのでしょう。主だったデジタルフォントの供給元が写植メーカーであったこと、新興のフォントメーカーは写植書体のタイプデザイナーや書き文字に優れたデザイナーに書体開発を委ねて、フォントのラインアップを整備するだけで精一杯という事情もあつたのでしょう。ですから日本語書体のデザインと同じ原字用紙に欧文をデザインするという常識を打ち破ることができなかつたと思います。

創成期の混乱や試行錯誤がやっと落ちつき始めた今、前二者が解決できなかった混植に配

- 参考文献・関連書籍
- 『先駆者岸田吟香』杉山栄著、一九五二年、岸田吟香顕彰刊行会
  - 『新聞事始め』杉浦正、一九七一年、毎日新聞社
  - 『ヘボンの手紙』高谷道男編訳、一九七六年、有隣堂
  - 『ヘボン書簡集』高谷道男編訳、一九七九年第四刷、岩波書店
  - 『ヘボン』高谷道男著、一九八六年新装版、吉川弘文館
  - 『ヘボンの生涯と日本語』望月洋子著、一九八七年新潮社
  - 『国字問題の研究』菊沢季生著、一九三二年、岩波書店
  - 『欧文活字とタイポグラフィ』欧文印刷研究会編、一九六六年、印刷学会出版部
  - 『図録 タイポグラフィ・タイプフェイスの50年』デジタル時代の印刷文字「二〇〇四年、女子美術大学増補版印刷字典」日本印刷学会編、一九九一年印刷局朝陽会
  - 『組みNOWー写植ルールブック』写研・写植ルール委員会編、一九七五年、写研

慮した従属欧文の開発が進んでいます。大日本スクリーン製造のヒラギノ明朝体は欧文のベースラインを少し上げること、ディセンダーが広くなり、重心が日本語体に近づいています。Adobeの小塚明朝も字工房の游明朝体も混植を強く意識していることがわかります。これらの書体は、日本語書体と欧文書体では仮想ボディを変えてデザインする、という発想に立っていることは明らかです。しかしまだまだ解決しなければならない問題があるはずです。これからがデジタルフォントの本格的な開発の段階に入るのではないでしょうか。そのとき他言語との混植は避けて通れない重要な要素になります。デジタルの世界は国境を楽々と越えていきます。同一ライン上に各国の言語書体が等価で綴られること、これほど平等なことはありません。思想の違い、富の差、技術力の優劣、人口の多寡などその国の文化にとってたいした問題ではないといったら怒られるでしょうか。言語書体こそその国の文化を端的に表します。私達はいま異なる文化を前にして、より真摯な姿勢が求められているのだと思います。



連載第五回「書体の覆刻」を読んで下さった仙台在住の内田明さんから嬉しいお便りをいただきました。

私は「築地体後期五号仮名」に切り替わったのは明治三〇年代中頃と書きました。内田さんは国会図書館の近代デジタルライブラリーに登録されている築地活版の印刷物を精査され、その結果前期五号が後期五号に切り替わるのは「明治三一年から三二年にかけて」と結論づけておられます。デジタルライブラリー以外の印刷物にあれば判断が変わるかもしれないとおっしゃっておられますが、この判断は変わらないように思います。

内田さん有難うございます。今後もご指摘を待っております。

●組版仕様

書体＝ヒラギノ明朝 Pro W3 (漢字・欧文・ラテン数字)＋築地体前期五号仮名(仮名、「日本の活字書体名作精選」より)  
 見出し＝オナズ：60 級/中見出し＝オナズ：32 級、字送り：プロポーショナル、行送り：40 階  
 本文＝オナズ：16 級、字送り：16 階、行送り：30 階、1 行：41 字詰め・22 行  
 頭註＝オナズ：10 級、字送り：10 階、行送り：13 階、1 行：21 字詰め・50 行  
 ●発行＝大日本スクリーン製造株式会社 ●デザイン・組版＝向井裕一 (gypn) (2005.02.22)